



# 東日本大震災追悼式

東日本大震災から12年となる3月11日(土)、ご遺族・来賓あわせて53人の出席のもと、令和4年度浪江町東日本大震災追悼式を「如水」典礼さくらホールにおいて執り行いました。式の冒頭、参加者全員で黙祷を捧げ、犠牲になられた皆さまのご冥福を祈りました。



吉田栄光町長  
「お悔やみの気持ちを込めた弔意」

吉田栄光町長は式辞の中で、「昨年、「福島国際研究教育機構」の立地が決定し、世界に冠たる「創造的復興の中核拠点」として、この先100年の新生浪江町の発展のために、国や県、周辺自治体とともにこの計画を進めていきます。また、令和5年3月31日(金)、ようやく津島、末森、室原の特定復興再生拠点区域で避難指示が解除されます。これからも「ふるさと浪江」の復興が完了するその日まで、町内一丸となって取組んでいく」と、決意を述べました。

続いて、遺族を代表して父親を亡くされた浦島博之さんが追悼の言葉を述べました。



遺族代表 浦島 博之さん

本日ここに、令和4年度浪江町東日本大震災追悼式が挙行されるにあたり遺族を代表し、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

あの日から「亡くなられた命」と「生かされた命」との違いを考えていました。あの日は、仕事で富岡町のお客さま宅に着いたところでした。地震の後、大津波警報が出たので、お客さまに「自宅が請戸なので今日は帰ります」「明日また来ます」と伝え余震と雷と吹雪の中、帰路につきました。

夕方、やっとの思いでたどり着いた請戸は、津波に破壊された家も車も船も押し流されて大平山の橋の所で、ガレキの山となっていました。そして、そこから先は、海水にのみ込まれ、大海原の様に見えました。ガレキの山から先へは進めない中、うめき声が聞こえました。途端に地震の時、自宅にいたはずの両親を探さなくてはならないと思いましたが、その場を離れ、各避難所を探しました。夜9時頃、偶然、妻と合流することが出来たのでそれから二人で夜通し探しました。夜中、棚塩街道を通った時、昼間の天気とは打って変わってあたり一面静寂に包まれて、月明かりが海面に映り切ないほど美しく見えました。翌朝、姉と甥を車に乗せて再び

請戸に来ました。朝からヘリコプターが飛んでいたのが救いが始まると思えました。どんな災害や事故であっても翌日には捜索が始まると思っていました。しかし、原発が危険な状態にあると全町民が避難を余儀なくされました。「あのガレキの下に」「あの海水の下に」助けを待つ人が確かにいるのに。私たちは避難せざるを得ませんでした。私たちは「生きる為に」請戸から離れました。それは、ずっとずっと、今でも、心のしこりとなって残っています。

その後、およそ1か月後に請戸は放射線量が低い事がわかりました。それからの捜索により、遺骨となった父に直面出来たのは6月29日でした。生かされた私達は「遺族」となりました。13回忌を迎える今年、亡くなられた命に思いをはせ、後世に伝える為、私は生かされたのかもしれない。結びに、今日も、捜索を続けて下さっている、警察や関係機関の方々から感謝申し上げます。この大震災で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りし、遺族代表の言葉と致します。

